

表舞台に立てない「社会的なもの」の検討

一橋大学社会学研究科・日本学術振興会特別研究員 DC1 國本哲史

1 問題意識

社会学はその始まりから「社会的なもの」を扱ってきた。しかし近代に入り、分化という考え方が当たり前になっていく中で、大きな物語は避けられるようになった。これは、一つの文化や統一された国民といった斉一的な見方が誤りであるという、人類学や社会学の諸研究の結果である。

社会学はこうした状況で、次第に中範囲の理論、さらには観察できるものだけで研究を構築する傾向を示してきた。しかし、私たちの多くは研究上、未だに「社会的なもの」に向かっていこうとしている。この「社会的なもの」は、しばしば私たちの集団に関する直観 (folk group psychology) に根拠づけられており (唐沢・戸田山 2012)、一度この直観を説明項として経験的データを説明すると途端にその曖昧さが批判される (界、階級) ように、非常に曖昧なものである。この曖昧さは、社会学にとって「社会的なもの」を正面から扱うことを避けさせてきたのではないだろうか。しかし、それは理論の前提であり、前提が異なれば、研究者間で様々な点で認識のずれが生じるはずである。そのために議論がかみ合わないことも増えるだろう。こうした不毛さを取り除くためにも、「社会的なもの」は整理されなければならない。

2 目的

こうした問題意識から、本発表は、社会学の研究にとって前提となる「社会的なもの」を整理・分類し、経験的なデータから「社会的なもの」を導出する困難と、解決の方法論を探究することを目的とする。

3 方法

「社会的なもの」の整理にあたって、田中耕一の議論を参照する (田中 2014)。田中は、「社会的なもの」を考察する中で、パーソンズの社会観、構築主義者たちの社会観、反表象主義者 (シェグロフ) の社会観を分析し、社会学が進んでいくべき方向性を検討している。

4 結果

田中の「社会的なもの」の議論を敷衍することで、「社会的なもの」は<主観主義/客観主義>と<表象主義/非表象主義>の軸による 4 象限に分類整理ができ、「社会的なもの」をどの象限で捉えるかによって、研究の前提が大きく異なること、それぞれの象限はそれぞれ経験的なデータの扱い方に限界を持っており、どれか一つの象限だけの研究で「社会的なもの」が捉えきれないものではないことが明らかになった。

5 結論

こうした結果を踏まえ、今後も社会学が「社会的なもの」へと向かっていくためには、社会的なものを隠しながら扱うのではなく、疑義や批判に開かれた形で、意図的に表舞台において扱う必要が指摘できるだろう。また、各象限の統一的な戦略の一つとして、個人と社会をつなげようとしたハビトゥスや社会化といった考え方を利用しながら、言説に注目する発表者の方法を提示したい。

唐沢かおり・戸田山和久編, 2012, 『心と社会を科学する』東京大学出版会。

田中耕一, 2014, 『<社会的なもの>の運命』関西学院大学出版会。